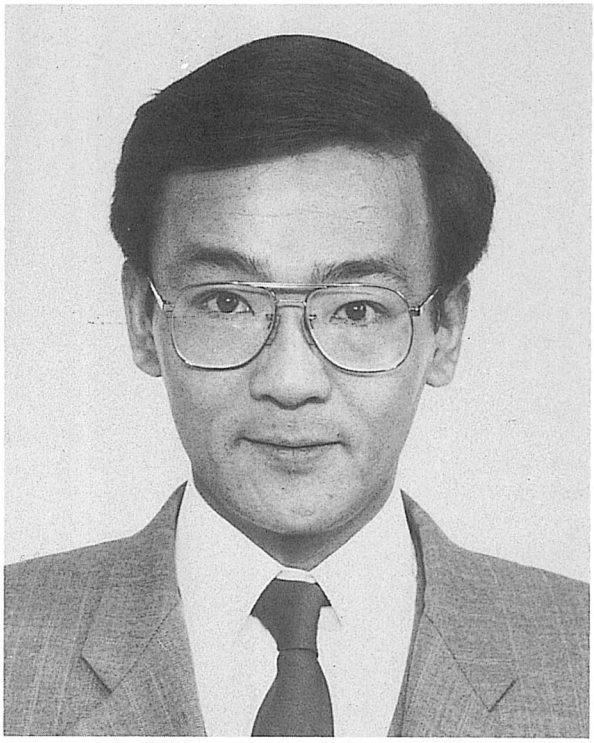

故 中 西 良 夫 教 授

中西良夫教授略歴

—略　　歴—

1945年3月16日兵庫県に生まれる

1960年3月	関西学院中学部卒業
1963年3月	関西学院高等部卒業
1963年4月	関西学院大学経済学部入学
1967年3月	関西学院大学経済学部卒業（経済学士）
1967年4月 1983年3月	関西学院高等部　英語科教諭
1970年4月	関西学院大学大学院文学研究科修士課程入学
1972年3月	関西学院大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程修了（文学修士）
1972年6月	米国コロンビア大学大学院ティーチャーズ・カレッジ TESOL 留学
1973年8月	米国コロンビア大学大学院ティーチャーズ・カレッジ TESOL 留学修了（M. A.）
1974年4月 1988年3月	関西学院大学社会学部非常勤講師（英語）兼務
1976年4月 1982年3月	関西学院大学文学部非常勤講師（教科教育法）兼務
1977年4月	関西学院大学大学院文学研究科教育学専攻博士課程入学
1977年4月 1981年3月	関西学院大学法学部非常勤講師（英語）兼務
1980年3月	関西学院大学大学院文学研究科教育学専攻博士課程満期退学
1980年4月 1983年3月	関西学院大学大学院文学研究科教育学専攻研究員
1983年4月 1988年3月	平安女学院短期大学英文科（助教授）
1984年4月 1988年3月	関西学院大学総研及びキリスト教主義教育研究室特別研究員
1988年4月	関西学院大学社会学部　助教授

1990年4月　関西学院大学社会学部　教授

他に学会等における活動として

1987年4月
1988年3月　日本時事英語学会「紀要」編集委員

日本英語検定協会準一級検定委員

日本時事英語学会会計委員

関西教育学会会員

日本大学英語教育学会会員（JACET）

日本語学教育学会会員（JALT）

アメリカ TESOL 学会会員

1994年9月15日アメリカコロンビア大学病院にて召天
（現地時間9月14日）

中西良夫教授の業績

<著　作>

—著　書—

『パラグラフ・リーディング入門 —文章構造に重点をおいた英文解釈』第2版	つぼた印刷	1980	4
『連文の構造からみる英文パラグラフの論理と展開』	ロータリービジネス社	1985	2
Readings from Tales of The Dervishes, Written by Idries Shah	ロータリービジネス社	1988	4
『現代教育原理』 仲原晶子・武安　宥　編 「教育工学」の章（分担執筆）	昭和堂	1990	2
教育実践の探究—現代教育方法基礎論—（分担執筆）	昭和堂	1994	4

—論　文—

A Farewell to Arms 論　—「中空の文学」—	論叢第16号　関西学院高等部	1970	12
Hemingway 短篇研究（一）—戦争体験を軸として	論叢第17号　関西学院高等部	1971	12
A Study of Hemingway's Short Stories in The First Forty-Nine Stories	文学修士論文　関西学院大学	1971	1
Some Insights from F. Smith's Understanding Reading -How His Theory is Related to Language Teaching-	論叢第19号　関西学院高等部	1973	12
Developing Comprehension in Reading -Some Practical Suggestions-	論叢第20号　関西学院高等部	1974	12
英語文章構造の理解 —パラグラフの構造と思考展開を中心に—	論叢第21号　関西学院高等部	1975	12
Paragraph 構造の理解と Reading	英語部会のあゆみ第2集　県高校教育研究会	1977	5
英語教育の刷新とパラグラフ・リーディング	私学研究論集　県私学総連合会	1978	11
『パラグラフ・リーディング入門』の批判と今後の展開	論叢第24号　関西学院高等部	1978	12
英語の文章理解と Paragraph Reading	近畿地区研究集録　私学研究会	1979	2
『ヘルバルト—その時代と現代』 （小西純氏と共訳）	文学部教育学科研究年報5　関西学院大学文学部	1979	3
日本語における『段落』意識とパラグラフ・リーディング	私学研究論文集　県私学総連合会	1979	11
J. Fr. ヘルバルトの「多方面興味」と「形式段階説」 —『一般教育学』を中心に—	人文論究第30巻1号　関西学院大学人文学会	1980	6
日本の英語教育の世界史的位置 —日本の「鎖国」と「開国」の意味を求めて—	論叢第27号　関西学院高等部	1981	12

W. R. ランバス博士の アフリカ伝道と伝道方針 —「アフリカ雑記」の 翻訳の中間報告にかえて—	キリスト教主義教育第12号　関西学院大学	1982	7
「オーデンバルト校 —オーベルハムバッハ」 —生活と学習を調和的に 実現する試み—（翻訳）	文学部教育学科研究年報８　関西学院大学文学部	1982	11
W. R. ランバス博士のアフリカ旅行と アフリカ伝道の展望 —「アフリカ雑記」を訳しおえて—	キリスト教主義教育第14号　関西学院大学	1985	7
ヘミングウェイの 「Indian Camp」再考 —Hemingway 短篇研究（二）—	英学第17号　平安女学院短期大学英文学会	1985	3
W. R. ランバス博士の アフリカ旅行の目的地 ウェンボ・ニイアマのムラを求めて	キリスト教主義教育第15号　関西学院大学	1985	10
Some Implications of John Fanselow's "FOCUS" approach	英学第18号　平安女学院短期大学英文学会	1986	2
英文読解力向上とプログラム学習	関西教育学会紀要　関西教育学会	1986	3
Para. Reading, Guided Q's, パソコンによる時事英語教育	英語教育 Vol. ＸＸＸ　大修館	1986	12
二つのリーディング・プロセス・ モデルとその意味 —現行リーディング指導の批判と展望—	英学第19号　平安女学院短期大学英文学会	1987	3
パーソナル・コンピュータ使用の 物語作成とその意義 —カレッジ・レヴェルの作文指導の 実験授業をふりかえって—	京都英語教育研究会論叢　京都英語教育研究会	1988	3
ギルバート博士の 第二伝道旅行不参加の事情をめぐって	キリスト教主義教育18号　関西学院大学	1988	3
ロジャー・シャンク『説明の諸類型』に学ぶ —「読み」の CAI から「理解」の AI へ—	英米文化研究Ｘ　論攷　関西学院大学	1989	3
語学教育のための インターアクション・ジェネレーター	社会学部紀要第58号　関西学院大学社会学部	1989	3
"Interaction Generator in Language Teaching"	京都英語教育研究会論叢第２号　京都英語教育研究会	1989	3
CAI コースウェア作成のコンセプト —CAI から AI へ—	関西教育学会紀要13号　関西教育学会	1989	7

故中西良夫教授を偲んで

社会学部長　西　山　美瑳子

中西良夫教授は、日本時間の1994年９月15日午前８時20分に天に召されました。中西先生のアメリカでの突然の御逝去は、御遺族・御親族をはじめ、関西学院・関西学院大学の関係者、同僚、友人にとって全く思いもよらない出来事でした。中西先生は、スタンフォード大学の海外学生セミナーに関西学院大学の学生を引率して渡米中に、生蛎のビブリオ菌の感染症で御発病になり、スタンフォード大学病院や中西先生奥様の懸命の御看病の甲斐なく亡くなられました。

ここでは、中西先生の関西学院や関西学院大学、そうして社会学部での御活動、御奉仕についての感謝を捧げるとともに、御逝去前後の状況について記録を残す意味からも述べることに致します。

先生の社会学部での御日常は、非常にお忙しかった中にも、いつもさわやかな笑顔で、教職員や学生と談笑し、教授会においては、明快に御自分の意見を主張されていました。私どもは、そうした先生が、社会学部の英語教育に御自分の健康を犠牲にしてまでも専念され、御努力されていることに、大きな敬意と感謝を払いつつも、時には御健康が気になることもございました。中西先生は、つねづね、大学の英語教育に目標や夢をお持ちで、そうしてその実現への実行力を備えておいでで、先生のお陰で幾つかの新しい試みが実現し、また計画中のものもありました。このことを考えますと、先生御自身のみならず、関西学院や社会学部にとっても、先生が御逝去になったことは、まことに大きな痛手であり、大きな打撃と申すほかはございません。

中西先生に最後に私がお目にかかったのは、先生がアメリカにお立ちになる前日でした。８月20日土曜日午前中に第一教授研究館でお目にかかりました。先生は、この時、スタンフォード大学での言語社会学の学生セミナーに、関学社会学部の学生が出て行くから、私も明日からアメリカに行くとの事でした。その時の先生は血色も良く、さっそうとして足取りも軽ろやかで、にこやかに会釈をしながら第一教授研究館を出ていかれました。

中西先生が御病気になられた第１報は、米国日付の９月１日に、スタンフォード大学のセミナー・プログラムの総責任者であるDwight Clark先生から、関西学院大学社会学部へFaxで送られてきました。社会学部からもスタンフォード大学病院に中西先生についての診断書の発行を依頼し、診断書がFaxで学部宛に送られてきました。Clark先生から

は、その後も米国日付の9月14日まで、中西先生の御容体について、たびたび、Faxで連絡をいただきました。それと並行して、スタンフォード大学のセミナーで中西先生と一緒に関学の学生の面倒をみてこられた本学社会学部Alan Brady助教授からは、中西先生の御容体について、毎朝のように朝早く西宮市のBrady先生奥様宛に連絡が入り、その内容はMrs. Bradyから、社会学部事務室や私宛に電話やFaxで知ることができました。私どもは一喜一憂しながら、望みをつないできたのですが、米国日付の9月14日に、最後の悲しいFaxが、Clark先生から送られてきました。その後、Clark先生から改めて丁重な弔文をいただきました。

Monterey国際研究所のJeffery B. Wood先生からも弔文をいただきましたが、中西先生のMemorial Serviceには同僚とともに出席されたとのことで、関学とMonterey Institute との間のSummer　ESL　Programの成立には中西先生のお力があったことを記して、深い悲しみの表明に加えて、素晴らしい人と仕事をすることができたことに感謝すると書かれていました。

1994年10月21日（金曜日）に、スタンフォード大学の上掲セミナーの総責任者Dwight Clark先生が本学社会学部に御来学になり、中西先生のセミナーでの御様子、御発病時からのスタンフォード大学での御様子などを、Brady先生とお二人から、こもごも改めて、私どもは伺う機会がありました。お二方の話によりますとセミナー開始から10日間は中西先生とBrady先生は、勉強に専らの1日中のプログラムに、学生とともに行動され、食事も学生とご一緒であり、夜のプログラムにも、午後10時、11時と学生に対応されていたとのことでした。8月28日（日）にセミナーのスタンフォード側の代表者であるClark先生とこのセミナーの発起者である関西学院大学の中西先生、関学グループのリーダーであるBrady先生、そうして慶応義塾大学総合政策学部の高橋先生の4人で、スタンフォード大学側の招待による夕食会に出席され、そこで、社会学を中心にしたプログラムのコースについての検討が行われたとのことでしたが、この夕食でも先生は御好物の生蛎を、先生だけが召上がったのでした。

中西先生の帰国予定日は、セミナーの終了よりも一足早く、その会食後の3日後の8月31日（水）でした。その帰国予定日の8月31日朝、中西先生の宿舎を訪れたClark先生は、中西先生が自室で、荷物は鞄の中にすでに整理ずみでしたが、非常に疲れて、しかも左腕がはれて非常に痛いとの訴えに、急いで病院に先生をお連れしたとのことです。スタンフォード大学病院では、その31日当日に中西先生の左腕の手術が行われましたが、その後の先生の御病状の診断には数名の医師が当たり血液検査の結果、貝類の特定の菌が検出されたとのことで、大学病院では、治療方法の参考にするために、その同じ病原菌vibrio vulnificusによる患者がいる病院を求めて、世界に向けてコンピュータによる発信・情報検索を行ったところ、香港に1人その患者がいたことがわかったが、その人は既に亡くなっていたとのことでした。

社会学部の求めに応じて、9月11日付けで社会学部にFaxで送られてきたスタンフォー

ド大学病院の診断書で、私どもはこの病原菌の名前を知り、中西先生が集中治療室で加療中で、手厚い治療が進められていることも推察することができました。診断書に記された病原菌は、日本の医学書[11]によると、この菌は日和見菌で、これに当たった人の致命率は50%という記載があることを、そうして肝臓の既往症がある人は海鮮物の生食には用心する必要があることを、この医学書の記載内容から、私どもははじめて知った次第です。

日にちは前に遡りますが、中西先生は9月2日には心肺機能を助けるために人工呼吸器をつけておられたそうで、苦しい息の下から、「しけん、しけん」と言われ、大学での入学試験担当者としての責任を気にしておられたようで、今更ながら、先生の責任感の強さに感銘を受けます。9月3日に中西先生の奥様が先生のもとに日本から到着され、病院側と奥様の懸命の看病が続けられましたが、次第に話をされることも困難になられ、現地時間14日午後4時20分にお亡くなりになりました。その3時間前にお子様方も御到着になられたと伺いました。私どもは全く思いもよらない事柄で今更ながら残念でなりません。

この度のスタンフォード大学の言語社会学を中心にしたプログラムには、中西先生は、Brady 先生とともに学生の異文化交流と実力増強への試みとしてこの計画をすすめられ、お2人は無報酬でこのプログラムに参加されたのでした。8月下旬からのスタンフォード大学の交換プログラム実施中の最初の10日間は、中西先生は、お元気で学生の世話をされ、楽しく過ごされていたと伺っています。このセミナー自体は、伺うところによれば、大変うまく進み、学生もよく学習を重ね、関西学院大学からの参加者26名全員が無事、スタンフォード大学の正規の社会学の単位を取得し、とても有意義な時間を過ごすことができたとのことでした。中西先生の御病気の状況は、スタンフォード大学の先生方の御意向で、学生たちには知らされず、Brady 先生は学生たちの帰国を空港に見送ったその足で、すぐ病院にとって返し、ずっと中西先生のおそばにおられたとのことでした。全く思いがけない御病気で、このようなことになったのは痛恨の限りでございます。

中西先生は、1988年から関西学院大学社会学部の助教授として御赴任になり、1990年に教授になられ、関西学院大学や社会学部の英語教育に大きな功績を残されました。すなわち、社会学部で、従来2年間にわたって行われてきた英語乙の授業を、第1学年次に集中的に実施し、そのやり方もネイティブ・スピーカーと日本人のバイリンガルの教員とが、ペアになって同一クラスを担当することにより、クロス・カルチュラルなコミュニケーション能力を身につけさせることを目指すという、全く新しい試みを効果的に実行するために奔走され、授業計画と関係者間の調整に努力をされ、この実施を楽しんでもこられたのです。また学部外でも、関西学院大学全体の英語教育の改革の試みにおいて、中心的な役割を担われ、とくに言語教育センターの設立と英語契約教員によるインテンシブ・プログラムのいわば生みの親となられました。そうして言語教育センター設立と同時に副長となられ、インテンシブ・プログラムのコーディネーターとしての2年間その実施に献身的な働きをなさったのです。

なお、中西先生は、関西学院キリスト教主義教育研究室や学院資料室において、関西学

院高等部に在職時代も含めて長らく御活動になり、社会学部のキリスト教教育委員会においても御奉仕を続けてこられました。先生は大学学生時代に母校高等部への教職の志を立てられ、16年間高等部での教職にあり、その後他大学を経て、関西学院大学社会学部に6年間在職されたことになり、関西学院における教職年数は22年を数えます。先生は関西学院高等部在学中に受洗され、クリスチャンとしての篤い信仰と教育者として学生への愛情と教育への熱意をもって、その生涯を貫かれたのでした。中西先生は、このように、ご出身からしても中学、高校、大学と関学で過ごされた生粋の関学人でした。関学の高等部に対しても特別に強い愛情を持っておられ、私どもに対しても、しばしば高等部の教育や現状について、先生の見解を折りにふれ述べておられました。

社会学部の英語教育は、中西先生の長期的展望を持つダイナミックな計画と献身的な熱情に支えられて、ここ数年間で大きく変ってまいりました。学生の全体的なレベルアップ、そうして出来る学生にはそれに対応したプログラムをと、学生の成長への大きな信頼とその実現へのプロセスに向けて、次々とその実施をはかってこられました。中西先生の関係者に対する誠意と身を粉にした御努力があって、幾つかのことが実現して来ました。望ましい結果が出たときの、そうして未来への計画について語られる時の、先生の輝いた嬉しそうなお顔を拝見して、先生のお人柄と学識、識見に深い感銘を受けるとともに、先生は、今、正に教育者としても研究者としても昇り坂をどんどん昇って円熟期においでになる、と感じて改めて敬意を深く致したことでした。先生が、研究者・教育者としてその成果を確かめつつ、前途に大きな展望を持ち進んでおられたこの時期に、49歳の若さでの突然の御逝去は、全く無念としか言いようがございません。

中西先生が今までに行ってくださった関西学院での大きなお働き、社会学部の英語教育におけるキイパースンとしての御存在を、あらためて思い起こしますと、社会学部に大きな穴が空いてしまいました。社会学部としては、中西先生が種を蒔き育てて下さった英語教育の実をあげ、先生の御遺志を発展させていきたいと考えております。安らかな永遠の世界で、中西良夫先生は、慌ただしかった現世を離れて、今しばし静かに御休息になっていらっしゃるかもしれません。中西先生の御家族、御親族の上に神様の深い御恵みがありますようお祈り申上げます。

註）小澤　敦・善養寺治・緒方幸雄・橋本一男・吉田孝人・一言　広著『医学微生物学』南山堂、1986年（2版）、1991年（2版、3刷）、Ⅲ．ビブリオ（善養寺治）、A．ビブリオ科1．ビブリオ属4）創傷感染あるいは日和見感染ビブリオのc）Vibrio vulnificus の項（267頁）参照。

「走りぬいた人生」

——社会学部追悼礼拝式辞——

1994年10月29日・ランバス記念礼拝堂

船　本　弘　毅

今日、わたしたちは去る9月14日、日本時間では9月15日、アメリカのスタンフォード大学病院で天に召された中西良夫先生を追悼するために、ここに集まっています。

中西先生は1945年3月16日のお生まれですから49年と6ケ月の人生でありました。その若さ、また突然の思いもかけないご逝去にわたしたちは驚きと無念さを禁じ得ません。中西先生が学生たちの研修旅行につきそったスタンフォードで入院されたというニュースが入りましたのは、9月1日でありました。ファックスには病状が決して軽くないと記されていましたが、それが生命に関わるほどのものとは想像もいたしませんでしたし、その後に続いて届けられたファックスの文面も二・三週間は集中治療室に入らねばならないだろうというようなものでしたから、わたしたちはやがて元気になられて、あの人なつこい笑顔で、「やあ、大変な目に会いましたよ」と言いながら、その姿をあらわされることと思っていました。

しかしわたしたちの思い、願い、祈りに反して10日頃から病状は悪化し、遂に9月14日天に召されたのでありました。すでに1ケ月以上が過ぎ去りましたが、今でもなお信じられない思いであります。御家族の皆様にとっては尚更のこととご推察申しあげます。

わたしが中西先生と親しく知り合うようになりましたのは1968年のことでありました。当時『世俗都市』(Secular City) という書物を出版し、それがベストセラーになって全世界から注目をあびていたハーバート大学のハーヴイ・コックス (Harvey Cox) という学者がいましたが、彼のその後の論文を集めた書物の翻訳をわたしは依頼されておりました。その一部をちょうど高等部の英語教師として赴任されたばかりの中西先生にお助けいただいたことがあり、それをきっかけに中西先生とは個人的にも親しくさせていただきました。中西さんは少し固い日本語でしたが、実に正確な訳をして下さり、わたしはその時、中西さんの誠実で堅実な人柄に触れた思いがいたしました。ここにその書物を持って来ておりますが、そのあとがきに、わたしは、「友人の中西良夫兄は訳の一部を助けてくださった。記して感謝をしたい」と書いています。

実はこの本は『世俗化時代の人間』(新教出版社) という日本語の題で出版されたのですが、原題は On Not Leaving It to the Snake であり、直訳すると「蛇のなすがままにさせるな」といった意味であります。御存知の通り、旧約聖書の始めに天地創造と人間創造の物語が出て来ますが、最初の人間となったアダムとエバは、蛇にそそのかされて禁断の木の実を取って食べて罪を犯し、そのためエデンの園を追放されたという堕罪の物語がそこに記されています。

伝統的には、この物語は人間が神の命令にそむいて自から神の如くなろうとしたところに、人間の罪があると解されるのですが、コックスは、むしろここでは人間の怠惰の罪が問題にされている。すなわちアダムとエバは禁じられた木の実に手を伸す以前に、自分の能力と責任をへびに明け渡し、へびのなすがままに身をゆだねた罪があると主張するのです。したがってアダムとエバは、真に人間であろうとせず、そして人間であり得なかった

人間すべてを指している。だからわたしたちは「蛇のなすがままにさせる」のではなく、この複雑な現代世界において自からの責任と義務を果たし、自からの決断において何をなすかを選び取って生きて行くべきだ、と論じています。

中西さんの生涯を思う時、わたしはかつて一緒に訳したこの書の主張するところを思い起こさずにはいられませんでした。中西さんは責任感の強い方でありました。関西学院の英語教育のために全力を注いで、先頭に立って打ち込んでおられました。病後の体であるにも拘らず、アメリカに出かけ不幸にして倒れられたのも、彼の使命感と責任感のなせるわざであり、惜しみても余りある死でありますが、中西さんらしい生き方であったのかも知れないという思いもいたします。

中西さんは1957年に関西学院中学部に入学し、高等部、大学経済学部に進み、いわゆる十年一貫教育を受けて1967年に経済学士の学位を得られたのですが、教師の道を選ばれ、卒業と同時に母校関西学院高等部の英語教師に就任されました。そして1970年には在職のまま文学部の大学院、英文学研究科に進まれ、更にアメリカのコロンビア大学大学院、ティーチャーズ・カレッジに留学、帰国後また文学部にもどり、教育学の博士課程の単位を取得されました。1983年に平安女学院短期大学英文科助教授に就任されましたが、1988年に社会学部に迎えられて助教授、そして1990年に教授に昇任されたのであります。

学びつづけ、全力を傾けて懸命に生きて来られた姿が、この履歴の中にもあらわれていると思います。英語教育の充実のためにネイティブスピーカーと日本人教師がペアーになって同一クラスを担当し、クロスカルチュラルなコミュニケーション能力を身につけさすという新しい試みを企てたり、言語教育センターの設立、ATE教師による集中的な英語教育の推進に、まさに全力投球をされました。

今日の式辞の題を「走りぬいた人生」といたしましたが、中西良夫先生は49年の生涯を懸命に走りぬかれたという思いがいたします。

中西さんは誠実なクリスチャンでありました。中学部の頃から、西宮中央教会に熱心に通われ、高校生会のリーダーとして活躍し、その頃伸子夫人と教会で出会われたとお伺いしています。奥様は初めて教会で出会われた時の印象を、「真面目一方で、物事を真剣に深刻に考える人だという印象を持ちました」と語っておられます。社会学部のチャペルでも、年に2〜3回説教を担当して下さいました。話が上手という方ではありませんでしたが、いつも心を込め、力を込めて、とつとつと語られる言葉は、学生たちの心に響く力を持っていました。

中西さんは人との関係をとても大切にした人でした。それはただ友人に向けられたのみではなく、駅のホームや旅先で出会った人にも及んだとお聞きしています。奥様の思い出によりますと、ある時突然スイスの画家を家に連れて来て泊めたことがあったそうです。何でも京都からの帰り道たまたま電車内で隣りに座り合せて意気投合して、家へ連れて来られたそうです。自分も留学中に受けた、人の親切が忘れられないので、恩返しをするのだと言っておられたそうですが、中西さんの人となりを告げる美しいエピソードだと思います。

先程、ピリピ人への手紙第2章の12〜13節をお読みいたしましたが。この句は、中西さんもわたしも、若き日に大きな影響を受けた元関西学院中学部長の矢内正一先生が愛誦された聖句であり、中学部の盾に刻まれている言葉であります。

パウロは反対者によって捕らえられ獄中にあって死を覚悟しながら、ピリピの教会員に向かって、「わたしの愛する者たちよ」と深い愛の思いを込めて語りかけます。そして曲

がった邪悪な時代のただ中にあって、傷のない神の子となることを勧め、そのために、すべてのことを、つぶやかず疑わないでしなさい、純真な者となりなさい、と勧めています。そしてその事を可能にするのは、「いのちの言葉を堅く持って立つこと」であると勧めるのです。

中西さんは若き日に、関西学院中学部の礼拝で教えられたこの言葉を追い求めて生きられたように思います。「キリストの日に、わたしは自分の走ったことがむだでなく、労したこともむだではなかったと誇ることができる。そして、たとい、あなたがたの信仰の供え物をささげる祭壇に、わたしの血をそそぐことがあっても、わたしは喜ぼう」(ピリピ2：16–17)と述べたパウロの姿を思います。中西さんもまたその生涯を信仰をもって、誠実に、人を愛し、教育の業に打ち込んで走りぬかれたのでした。もう少し長く生きて欲しかったという思いが残ります。残念だなあという気持ちを禁じ得ません。しかし今、わたしたちは中西良夫先生が愛し、信じ、すべてをゆだねて従われた主の御手に、中西さんをおゆだねいたしたいと思います。

奥様の伸子様、残された三人のお子様、お母様、御親類の皆様は、わたしたちの思いをはるかに越える大きなショックであり、深い悲しみを味わっておられることと推察いたします。どうぞ、立派に生きられた御主人様、お父様の生涯を誇りにして、悲しみを乗り越えて生きてくださるよう願って止みません。神様の愛と守りと恵みとが、常にみなさまと共にありますよう心から祈りまして、式辞とさせていただきます。

「ああ、勇士は戦いのさなかに倒れた」
——中西良夫教授の死を悼んで——

村　川　　満

中西先生が天に召されてから、この文章を書いている現在、はや二か月半が経過し、その間にもさまざまなことがありましたが、とりわけ、中西先生を高校生の時から霊的に導いてこられ、それだけに深い思いを込めて葬儀の司式をされた石田洵牧師が、その姿がわれわれの網膜に焼きついており、その追悼の説教の言葉がまだわれわれの耳に響いているような時に、まるで後を追うようにして召天されたことは大きな驚きでした。人間の生のはかなさを二倍に感じさせられたことでありました。

中西先生と最後に——これが最後になろうとは！——会ってことばをかわしたのは、7月11日だったでしょうか。来年度入試の全学の英語の責任者という重責を担っておられたので、その仕事の最も過酷な時が始まるのに備えて、持病の治療のため前日から県立西宮病院に入院しておられましたが、大事な会議のため病院から学校に出てこられたのでした。この入院はいわば定期的・予防的な治療のためだと伺っていましたので、あまり心配することもなく、お見舞いにさえ、願いながらも、行くことができないまま、退院ということになり、悪いことをしたと思いましたが、安心した次第でした。そのようなわけで、今年はスタンフォードの方には行かれないと理解していましたので、8月も終わりに近づいたある日、ご自宅にお電話してアメリカへ行かれたということを聞いたときには、本当にびっくりしました。その時わたしの頭をよぎったのは、三年前の玉田晃一先生のことでした。玉田先生は聖和大学から英語の非常勤講師として社会学部に来てくださっていた方で、われわれとは親しい間柄でしたが、中西先生とは同年輩で、しかも同じく肝臓の具合がよくないのに、夏休みの間にアメリカへ行かれて、それがもとで肝硬変になり、半年後に亡くなられたのでした。もちろんその時は、中西先生も無理をされると、いつかは同じようなことにもなりかねないと思っただけで、まさかそれが現実になろうとは思いもかけないことでした。ところが、まるで追いかけるようにして、現地で入院されたという知らせがはいり、愕然としました。これは大変なことになったと思いましたが、それでも、はじめはそれほど心配することはないというような話でしたので、最悪の事態になることは全く考えず、ただ回復には時間がかかるだろうと思って、ご本人がおそらく一番気にかけておられる入試の責任者の職務を他の方に代わっていただくようにお願いしたり、秋学期は十分静養していただけるよう、授業の手配をしたりしていました。ところが、相次いではいってくる知らせは、われわれの希望的観測を打ち砕き、容易ならぬ状況だということがわかってまいりました。わたしたちとしては、ただひたすら神様にいやしをお祈りするほかありませんでしたが、ついに、9月15日の朝、これまでずっと連絡をとってくださっていたブレイディ先生の奥様から、中西先生が亡くなられたという涙ながらのお知らせがありました。茫然として言葉もでない感じで、あの時ああしておればよかったのにという後悔の苦い思いが心を満たしました。同時に、あのように真面目でいい人を、いろいろのヴィジョンをいだいてその実

現に向けて懸命の努力をしているさなかに、若くして、しかも未成年のお子さんたちを残して、どうして神様は召されたのだろうかという思いが込み上げてくるのをどうしても抑えることができませんでした。そこで、かけがえのない同僚また友人を失った悲しみのなかで、むかしダビデ王が親友ヨナタンとその父であるサウル王の死を悼んでよんだ歌のことを思い出して、旧約聖書をあけてその箇所（サムエル記下第1章）を読んでみました。その歌のなかで、「勇士らは倒れた」ということばが三度繰り返されているのが印象的ですが、なかでも、「ああ、勇士らは戦いのさなかに倒れた」（25節）ということばがわれわれの胸に響きます。とはいえ、おだやかで、やさしく、平和な人であった中西先生には、この勇士とか戦いという言葉は何かそぐわないような感じがしました。しかし、つらつら考えていますと、中西先生の場合もまさしくこれだということに思い当たりました。

といいますのは、伝統的に地上の教会は「戦闘の教会」とよばれ、キリスト信者は聖書のなかで戦士になぞらえられています。したがってすべてのキリスト信者がそうであるように、中西先生も当然クリスチャン戦士であります。しかし、わたしがダビデの哀悼の歌のことばを中西先生に結びつけて思ったのには、そういう一般的な意味以上のものがありました。そして、西宮中央教会で行われた葬儀で、「立てよ、いざ立て、主のつわもの、見ずや、み旗のひるがえるを。すべてのあだをほろぼすまで、君はさきだち、行かせ給わん」ではじまる讃美歌380番が先生の愛唱歌だったということをはじめて知り、それを歌いながら熱いものが込み上げてくるのをおさえることができませんでした。まさしく、先生自身が自分の生涯を戦いとしてとらえ、クリスチャン戦士として、この讃美歌の「立てよ、わが主の力により、神のよろいをかたくまとい、みたまのつるぎ打ちかざして、おのが持ち場に、勇みすすめ」（3番）に鼓舞されて、教育という召命の場に邁進して行かれたのであります。

さらに、先生の場合、その戦いはとくに病気との戦いという形を取らなければなりませんでした。そしてその病気との戦いの中で仕事を懸命にやり抜かれたこと、それはまさしく勇士の戦いと呼ばれるにふさわしいものでありました。1988年に社会学部にこられましたが、すぐさま学部の英語教育の改革に取り組まれ非常な熱意とエネルギーを傾注して、改革の立案と実施に力を尽くされました。しかしその過労がおそらく引き金になって、翌年病をえて入院静養されることになりました。間もなく仕事に復帰されましたが、実際には以後5年間ずっと病気をいわば爆弾のように体のなかにかかえておられたわけであります。しかしその間、決して消極的な生き方はされませんでした。もっと体をいたわり養生して、細く長く生きるという生き方もあったと思いますが、先生は、一応健康を取り戻されると、手掛けておられた英語教育改革のプログラムの推進に全力投球で邁進されました。さらに先生の活動は、学部内にとどまらず、全学の英語教育改革にも中心的役割を果たされました。英語インテンシブ・プログラムのために、人材を探しにたびたびアメリカへ出張されたり、言語教育センターで会議その他でおそくまで仕事をしておられたようで、そんなに頑張られて健康に大丈夫だろうかといつも心配で、何度もそのことを申し上げてきましたが、いつも大丈夫ですと答えられました。今にして思えば、決して大丈夫ではなかったわけですが、先生は、関西学院とその学生たちをこよなく愛しておられ、そのためには身をすりへらすことも厭わないというお気持ちだったように思われます。先生は英語教育学を専攻されただけでなく、文学部の大学院で教育学も専攻されたことにも表れておりますように、単に技術的な語学教育ではなく、人間と人間との関わり合いの中での生きた質の高い語学教育を目指され、よい成果

を上げておられました。ですから、先生の教えを受けた多くの学生たちが心から先生を慕っておりました。このたびのスタンフォード大学における夏期研修のプログラムも、大学から何の支援も受けずに、先生が自分で計画し、実行に移されたものです。それもすべて社会学部生のためを思う献身的な熱意から出たものです。そのことを考えますと、無理をしてアメリカへ行かれなかったらこんなことにはならなかったのにという思いはどうしても拭いきれませんが、また、どうしても行かずにはいられなかった先生の気持ちもわかるような気がいたします。じじつ、学生たちと一緒にスタンフォードへ行かれ、ご自分が計画されたプログラムが実現されるのをその目で見、じかに体験されて、大変素晴らしい時を過ごされたようであります。しかし、そこで突然の発病、そして息つくひまもないように天に召されました。「ああ、勇士は戦いのさなかに倒れた」というダビデのことばが痛切にわたしの心に響いてまいります。愛唱歌の2番に、「立てよ、聞かずや主の角笛、いざ戦いの門出いそがん」とありますが、あまりにも急ぎすぎではなかったかと、悔やまれてなりません。

最後に（last but not least）、先生は真摯なキリスト信徒として、学部の宗教教育委員の務めを熱心に果たされたばかりでなく、キリスト教主義研究室の研究員となられて、とくに関西学院の創立者ランバス博士の文書の研究と翻訳に従事されたことにふれておかなければなりません。その一部は、W. R. ランバス『アフリカ伝道への祈りと足跡』祥文社、1990年、という立派な書物となって出版されましたが、福音のために困難をものともせず東奔西走され、ついに異国の地で天に召されたランバス博士への共感が中西先生を動かしていたことは間違いのないことです。このようにして、先生は、その短い生を実に立派に、見事に生き抜かれたということができます。そして今、愛唱歌の4番に、「立てよ、いくさはやがて終わり、とわの勝ちうた、高くうたい、尽きぬいのちの、かむりを受け、さかえの君とともに治めん」とあるように、とこしえの休みのなかに安らっておられると信じます。

どうか残されたご家族を神様が慰め力づけてくださるように心からお祈りいたします。